



■演劇のチカラ②—自己との出会い—

昨年末に、掛合分校卒業生の曾田昇吾さんが母校を訪れてくれました。

令和5年3月に掛合分校を卒業した曾田さんは、在学中に演劇と出会い演劇同好会の一員として活動を続けてきました。2年次には、当時演劇を指導していた亀尾佳宏教諭の誘いもあり同級生3人と演劇同好会として活動し、県大会地区予選で『走れ！走れ走れメロス』を上演。県大会出場と



はならなかったものの、演劇を志す契機となりました。同好会員が曾田さんだけになった3年次の県大会では『走れ！山月記』で一人芝居を演じ最優秀賞を獲得、中国大会でも第3位入賞を果たしました。そして、卒業後は“演劇界の東大”と呼ばれる文学座附属演劇研究所本科生の門をたたき、本格的に演劇に取り組んでいます。文学座での曾田さんの同期生は30名ほどだそうです。「稽古は大変ですか？」という私の問いかけに対し「大変な時もありますが、演劇が好きなので楽しい毎日です。年が明けると卒業公演があるので、それに向けて稽古を頑張っています。」と力強く答えてくれました。

曾田さんは、昨年山陰中央新報社の取材に対し「(小・中学校ではイライラばかりしていたが)高校で熱中できるものを見つけた。どこまでいけるか分からないけど本気でやる」とコメントしています。曾田さんにとって演劇との出会いは偶然だったのかそれとも必然だったのか…。しかし、演劇を通しての未知なる“自己との出会い”は必然的なものであったと思います。

令和4年、曾田さんたち演劇同好会の活動の軌跡を描いたドキュメンタリー映画『走れ！走れ走れメロス』(折口慎一郎監督)が製作されました。その作品は、サブカルの聖地下北沢、通称シモキタで開催された第14回下北沢映画祭で審査員特別賞や観客賞など4部門を受賞したほか、東京ドキュメンタリー映画祭2022入選など各地の映画祭で高い評価を獲得しました。上映はその後全国各地で行われ、じわじわと共感の輪が広がってきています。さらに、続編新作にあたる『走れメロスたち』が製作され、高校卒業を目前に控えて孤独や葛藤、焦燥を抱える彼らそれぞれの「選択」が描かれています。

映画の感想には「これは傑作。今年のドキュメンタリー作品でNo.1かもしれない。」といった、作品そのものに対する評価とともに「夢中になれるものがある、それだけで素敵だ！ラストには泣かされました。」といった、作品に対する感情移入を感じさせるものもありました。中には、作品中の主人公に自分を投影させた方もいらっしゃったかもしれません。鑑賞する方々に「ああ若い頃はこんな感じだったなあ」と若い頃を回想させるチカラ、「自分もこんな日々を過ごしてみたかったなあ」とある種憧憬の念を抱かせるチカラ、演劇にはそんなチカラがあると思います。

演劇により未知なる“自己との出会い”を果たし、新たな自分を発見した曾田さんだけでなく、演劇・映画を観た方々もまた、それぞれの人生を振り返り、本当の“自己との出会い”を果たしているのかもしれない。